

コラム

還暦すぎてオーナー・ドライバーに

高木兼寛は、若い頃は西欧化運動に熱中し、晩年には神道などの国粹的運動に熱心であったため、一部の人は「君子豹変」などと評されたことがあった。しかしこれを公平に眺めると、この第八話でのべるように、晩年になってもなお自動車の運転を習い、自ら日本最初期のオーナー・ドライバーになるなど、少しも保守化したようには見えないのである。

兼寛はもともと自分で動かせる乗り物には興味があったらしく、きわめて初期から自転車にも乗るし馬にも乗り、また馬車の駆者もすれば自動車の運転もしていた。それだけに多くの逸話や失敗談を残している。

日本に自転車が輸入されたのは明治20年であるが、兼寛はほぼ同じ頃これを購入している。その頃のこんな逸話が残っている。ある日、彼が自転車で紺屋町（兼寛の住所）の堀端を力一杯飛ばしていたところ、急に横道から人力車が飛び出してきたため、これを避けることが出来ず、自転車もろとも掘りの中に落ちてしまった。びっくりした車夫は体の重い兼寛を懸命に救い上げ、やっと助けることができた。幸い怪我もなかったので、兼寛はこれに感謝して、お礼として金5円也を贈った（5円といえば今日の5,6万円にもなる高額である）。予期しない高額の謝礼に二度びっくりの車夫は「こんなことなら高木先生にはもっとちよいちよい落ちて欲しい」と冗談を言って喜んだという。

兼寛はまた二輪馬車を上手に乗り回していたらしい。この二輪馬車というのはガタガタ揺れて大変難しいものであったらしいが、兼

寛はこれを上手に操ったという。ところがある日、馬が突然暴れだして大通りを馬車が暴走しはじめ、さすがの彼もこれをどうすることも出来ない、とうとう多くの人前で街路樹に衝突してやっと止まることができた。多くの人が心配するなかを、彼は悠然と「いい経験になったよ」といって剛毅なところを見せたという。

自動車も、兼寛は民間人としてはもっとも早く購入し、しかも自らこれを運転していた（車のナンバーは70番であった）。日本で自動車が最初に輸入されたのは明治40年であり、その年の車数は全部で16台、6年後の大正2年の車数は892台であったというから、車のナンバー70から推して、彼が車を購入したのはおそらく明治42、3年頃であったと推測される。そうすると彼はもう優に60歳は超えていたはずであり、今とちがって当時の60数歳といえども老境の年齢である。しかも車購入者のほとんどはお抱え運転手を雇う人たちであるから（彼もすでに男爵であった）、この年齢で自ら運転を習ってオーナー・ドライバーになろうとした彼の心意気はまことに壮と言うべきではなかろうか。

兼寛の自動車に乗せてもらった一人に日高 昂（慈恵医専眼科教授）がいる。彼の追憶談にこんなところがある。「私が芝紅葉館の宴会から帰らんとする時、後ろから『おい日高君、君は自動車に乗ったことがあるか、これで君の所まで送ってやるから乗れ』と云われたので、実際私は自動車に乗るのは始めてであるから大いに有難く、早速真ん中に乗り込んで男爵然と構え込んだ。本物の男爵閣下は運転手で、僅か七分で蛸殻町の拙宅に着いた。玄関から大声で、おい今日は立派の自動車で帰ったぞ。運転手閣下にビールを差し上げて呉れ、と云ったものである」と。（幸い当時はまだアルコールの規制はなかったようである）

兼寛はどこへ行くにもこの自動車を使っていたらしく、街でさ

ぼっている慈恵の学生がこのナンバー70の自動車を見ると、みな恐れをなして逃げたという逸話が残っている。

こうみてくると彼は晩年まで、あくまでも近代的合理主義者として、文明の利器を活用し、生活様式の改良を企てていたことは確かである。